

Twitter で書くことと読むこと

—タイムライン上の他者とリアルタイム性—

細馬宏通 (滋賀県立大学)



Twitter で発言の場を失うということ

ある事件

1980年代末以降、ニュースグループの「fj」やパソコン通信の時代から、ネットワーク上でのやりとりには関心を寄せてきた。現在も、各種SNSでどんなやりとりが可能なのかを見たくて一通りはアカウントを持っているけれど、個人的に特によく書き込んでいるのはTwitterである。サービスが開始された2007年以来、気がつけば10年以上利用している。それが、2017年9月、突発的にしばらく止めてみる気になった。きっかけは、文筆家で、2017年になって盛んに森友学園に関するツイートを書き込んでいた菅野完氏のアカウントがTwitter Japanによって「凍結」されたのを知ったことだった。わたしは氏の思想信条に共鳴する者ではないが、彼のツイートは一通り読んでおり、関西弁を駆使した語り口は苛烈ながら発言の場を奪われるようなものではないと感じていたので、Twitter Japanのこの判断は意外であった。

Twitter を止めてみたら？

突然自分のツイート機能が停止されるとどんなことになるだろう。わたしは2017年9月から10月にかけて、いわゆる告知文を除いて私的な考えを綴るツイートを自主的に止めてみた。

結果として分かったことは、Twitterに慣れ親しんだ人間にとって、ツイートという場がなくなるこ

とは大変不便だということだ。Twitterには独自の短さとリアルタイム性がある。日本語で140文字を上限とする各ツイートは、自他の発言の中において初めてその発言の性格がはっきりする。そして、何を言ったかだけでなく、いつ言ったかが重要になる。たとえば「おはよう」という簡単なツイートでさえ、それはタイムライン(TL)上に並ぶほかの発言者の「おはよう」とともに独自の意味を帯びてくる。そしてもしそれが7:58 AM - 11 Nov 2017というタイムスタンプを伴っていたならば、その発言が2017年秋のある土曜日の早朝に行われたことが分かる。さらに、発言者が朝の8:00から放送されるNHKの朝の連続テレビ小説のファンだということを知っていれば、この「おはよう」は、これから視聴されるドラマへのファン同士の身構えを含意していることさえ読み取ることができる。

こうした感覚は長い文章で構成されたブログでは生まれない。ブログはリアルタイムで次々と表示される他者の発言との併置を欠いているし、長い文章は書くのに時間がかかり、そこに付されるタイムスタンプは、書いている時刻ではなく、それを最後まで書き終わった時刻もしくはアップロードした時刻を示すことになってしまうからである。

リアルタイムに構成された自他の発言の流れは、自分の過去の発言を読み直すときにも重要な環境を提供しているのだということも、Twitterから離れてみて実感した。自分が誰のことばに影響されて発言を行い、それはどんな他者の反応を巻き起こした

かを、私は自身の TL 上で読み直すことで思い出す。TL は自分の発言の由来を想起するための記憶環境となっており、それが失われた途端、自分がツイートによっていったい過去にどんなことを考えたのかがあやふやになってしまうのである。

短い発言をさまざまな他者の発言の中にタイムスタンプとともに埋め込む。このような環境を失ってようやく、私は 10 年のうちに Twitter の提供する書き方や読み方に深く依存していた自分に気づいたのである。

Twitter で書くこと、読むことの特徴

ますます身近になっているスマートフォンと SNS の利用

いまや SNS は多くの人にとって身近なネットワークになっている。総務省の発行している平成 29 年版情報通信白書¹⁾によれば 2016 年度時点で、スマートフォンの保有率は 56.8%、20 代、30 代では 90% を超えている。その中で LINE、Facebook、Twitter をはじめとする代表的な SNS に加入している人は 71.2% で、20 代では 97.7%、30 代で 92.1% に達している。中でも興味深いのは LINE と Twitter の在り方である。LINE は各世代を通じて日本で最もよく利用されている SNS だが、それに次いで多いのが、20 代では Twitter (59.9%) で、Facebook (54.8%) を上回っている。一方、30 代以上は Facebook の利用が Twitter を上回っており、たとえば 30 代では Twitter (30.0%) に対して Facebook (51.7%) である。このことから、20 代と 30 代との間に、SNS の使い方に全般的な違いがあることが分かる。出身地や出身校などのプロフィールを詳細に記すことが推奨される Facebook より、そうしたプロフィールなしで匿名的に参加できる Twitter の方が、10 代や 20 代の人にとっては参加しやすいのかもしれない。

Twitter の特性

LINE も Twitter も、タイムラインに短い文章を埋め込むことができる場所に最大の特徴があるが、LINE が 1 対 1 や小さなサークル内での会話に適しているのに対し、Twitter は (いわゆる「鍵」をかけない限り) 不特定多数に開かれており、たとえお互いのアカウントをフォローしなくとも発言を閲覧することができる。

Twitter の開放性とリアルタイム性、そして匿名性はほかのマスメディアの速報性とも相性が良い。生放送のニュース番組には Twitter による投稿を受け付けるものがあるし、一般の人々のツイートが取材源になることもしばしば見かける。逆に、テレビ局や新聞社など各種ニュース媒体は公式アカウントを使ってニュースを流している。

もう 1 つ重要なことは、Twitter には、複数のユーザにとって議論の流れを蓄積する共通の場がないことだ。Twitter では、相手をフォローするという方法だけでなく、一方的にリストを作ることによって、自分の発言をほかのユーザの発言と自由に組み合わせてタイムライン上に表示することができる。Twitter ではしばしば「私の TL (タイムライン) 上では〇〇が流れている」という言い方がされるが、それは、発言者が、自分がいまだのような発言群を読んでいるかを示すとともに、それが必ずしもほかの人の TL とは共有されているとは限らないことに対する自覚を示している。

Twitter における「攻撃的な」議論

短い発言が他者の発言とリアルタイムで併置されることで機能する。その一方で、それぞれのユーザが自他のどんな発言を併置して読んでいるかは共通ではなく、お互いに明らかでもない。このような特性は、挨拶のような身軽なことばを交わすには気楽さを感じさせるが、ひとたび議論が起こりそれが攻撃的な調子を帯び始めるとやっかいな問題を引き起こす。

1980年代末から90年代にかけてのパソコン通信や「fj」や2000年代のSNSの代表格であるmixiでは、会議室、グループ、フォーラム、コミュニティといった場が設けられており、しかもそこでは各人の過去の発言をスレッドとして追うことができた。議論が激しくなってくると、その場を読んでいるだけの多数「ROM (Read Only Members)」について「ROMの意見も聞きたいですね」「ROMはこう考えてるんじゃないでしょうか」と言及することによって、書き込まずに読んでいるだけのユーザの意見を議論に取り込もうとするユーザも見られた²⁾が、そうしたROMはあくまで仮想的で不可視なものだった。

ところが、Twitterでは、先に述べたように複数のユーザにとって議論の流れを蓄積する共通の場がない。個々のユーザの発言を時系列を追って表示することはできるが、議論をスレッドに沿って表示することはできない。このため、議論が起こると第三者や本人によって「まとめ」サイトがあちこちに作られるのだが、さまざまなユーザ間で短い時間間に行われる発言のすべてをスレッドのように拾い上げることは難しい。また「まとめ」サイトでは必ずしも中立的な編集がなされるとは限らず、どちらか一方の論者に偏ったまとめサイトも散見される。

TwitterをはじめとするSNSはかつてのfjやパソコン通信に比べて圧倒的に利用者が多く、それだけ意見の多様性も増している。その結果、不可視なROMに変わって、持論を支持する実際の他者の発言が、検索やリスト機能によって容易に見え、そうした発言者の発言群をフォロワーやリストとして常時自分のブラウザに表示することができる。

そして何よりも強力なのは、リアルタイム性である。それぞれの発言に対して短い期間に他者の多くのコメントが寄せられ「炎上」する。その結果、長い時間をかけて事の正否を確かめる間もなく、それぞれのユーザのタイムライン上にそれぞれにとっての「真実」が一時的に見出されやすくなる。議論の

焦点が実際にどこにあり、何が「真実」だったのかが明らかになるころには、多くのユーザは議論から離れている。

こうしたTwitterの性質は、発言の攻撃性のみを突出させたり、真実とフェイク・ニュースの間を見えにくくさせることがある。

Twitterにおける倫理的基準の問題

ツイートの攻撃性は判断できるか？

近年、ツイートにおける嫌がらせやヘイト行為が問題視されるようになり、Twitter Japanは2017年になって「安全性」というタグのもとに、いくつかの方針をブログで公開している。おそらく冒頭にあげた菅野完氏に対する凍結も、こうした措置の一環なのだろう。しかし、Twitterの攻撃的発言では、個々のケースが多様で、「攻撃的」「嫌がらせ」の明快な基準がない。また、こうした発言に対しては、法的な処置をする前にTwitter Japanの独自判断によってアカウントの凍結などの措置が行われるのだが、現在のところ凍結の理由は何かや、凍結の原因となったツイート群が何かは、一般のユーザに明らかにされていない。さらに、実際には、発言の意味は単独の発言だけでなく、発言の応酬の中で理解されることが多いはずだが、凍結されたツイートは参照できないため、それがどのような発言群の中でどのように発言されたかを議論したり検証することもできない。その結果、凍結の基準は一般のユーザに共有されず、凍結理由について勝手な憶測を生んでしまうようになる。

SNSにおいて倫理的判断はいかに行われ得るか？

では、いわゆる「攻撃的な発言」や「嫌がらせ」を始めとする倫理的問題に対してSNSの運営側はどのように対処すればよいだろう。多様な発言を分類し普遍的な倫理的基準を作るのは難しい、むしろ

重要なことは運営側による措置がどのように行われ、どのような倫理的判断がそこで行われたかをそのつど公開することである。そのことで、運営側による恣意的な凍結に対してユーザが議論したり異議申し立てをすることができるし、不要な憶測を避けることができる。ちなみに、これらの議論において、凍結の対象となったユーザ発言の妥当性を判断するにあたっては、凍結されたツイートに注目するだけでなく、それらが他者のツイートとどのような発言空間を作っていたのかも参照する必要がある。

もう1つ重要なのは、基本的にアカウントの凍結は永久ではなく、一時凍結を原則とし、倫理的基準に関する議論の推移によってアカウントを迅速に復活できるようにしておくことである。冒頭で述べたように、Twitterの場合、ユーザの個々の発言は、他者とのタイムラインの中に埋め込まれており、Twitterという環境は、自他の発言がどのように生成されたのかを想起するための記憶装置となっている。それは当該ユーザだけでなく、ほかのユーザにとっても重要な想起の手がかりである。こうした環境は不当に剥奪されることがあってはならない。議論がつくされるまでは、少なくとも、当該ユーザの

アカウントは復帰可能な状態にしておき、そこで行われたやりとりが再現できるようにしておくことが重要だろう。

SNSという特定の会社が運営する発言環境や執筆環境は、いまや驚くほど多くの人々によって利用されており、我々の新しい書き方や読み方を提供している。そこで行使される倫理的基準は、単なる一会社の判断基準であるにとどまらず、多くのユーザの記憶の在り方にかかわるのである。

参考文献

- 1) 総務省：平成29年版情報通信白書（PDF版）（2017），<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/index.html>（2017.11.10閲覧）
- 2) 細馬宏通：コミュニケーションをめぐるコミュニケーション：電子ネットワーク上のトラブルを考える，谷 泰編「コミュニケーションの自然誌」，新曜社，pp.445-467（1997）。

細馬宏通 mag01532@nifty.com

滋賀県立大学人間文化学部教授。専門は日常における発話と動作の時間構造分析。質的心理学会，認知科学会，社会言語科学会，表象文化論学会各会員。主著に「二つの『この世界の片隅に』」（青土社）「介護するからだ」（医学書院），「ミッキーはなぜ口笛を吹くのか」（新潮選書），「うたのしくみ」（ぴあ）など。